今冷歷史散步

大 成 経 凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第25回は、今治でタオル製造が始まった頃の綿業界の動向を紹介し、明治・大正期の機業家たちの軌跡を歴史散歩したいと思います。

第25回 今治タオルこぼれ話

●今治タオル前史と矢野七三郎

藩政時代に今治地方の特産物であった白木綿でしたが、明治10年代後半になると市場で勢いを失っていました。これを憂う矢野七三郎が紀州から綿ネル技術(染色・起毛)を導入し、興業舎を組織して事業に着手するのが明治19(1886)年3月のことでした。早速、翌年に軍需用の綿ネルを受注しますが、社主の七三郎が同22年12月に兇盗に襲われ亡くなってしまいます。

これを明治25 (1892) 年に継承したのが柳瀬家で、興業舎は丹下辰雄支配人 (丹下健三の伯父) のもと、その資本力を活かして今治綿業界を牽引します (明治40年に株式会社に改組)。一方、村上熊太郎も明治29年に村上綿練合資会社を設立し、七三郎のもと職工だった岡田恒太や宮崎儀三郎 (現、みやざきタオル(株)) も、独立して伊予ネルの製造販売に尽力しています。

●今治タオルの創始と阿部会社

今治綿業界で興業舎との双璧で知られたのが、明治29年に阿部兄弟が創設した阿部合名会社でした。同社は綿ネ

ル製造を主業としながらも、長兄の 平助は同27 (1894) 年12月からタオ ル製造も試みていて、弟の光之助は 今治政財界に君臨して伊予綿練同業 組合長にも就任しています。

光之助子孫に伝わった阿部会社の 資料によると、明治30年上半期決算 の売上高は1万7760円64銭9厘で、 このうち綿ネルを中心とする反物売 上が全体の50%を占めています。タ オルは売上高全体の9%ほどで、そ の他層糸売上・原糸小売と続きます。 タオルは駆け込み需要があると生産 が追いつかない状況にあったようで す。同社は明治31年に大阪支店を設 け、同33(1900)年に蒸気機関を利 用した労織機を今治で最初に導入し



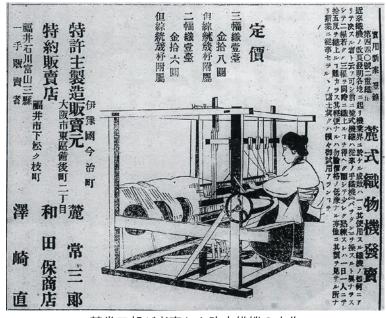
堀端にあった阿部会社工場 (『富の今治』(長谷川義一編/大正4年11月発行)

※阿部平助が「今治タオルの父」と称されるのに対して、光之助は「今 治商工業の父」とも称される。 ています。大正2 (1913) 年に阿部株式会社 に改組すると、洋晒移行にともなう最新設備 の導入などで、同5年でタオル製造はやめて しまいます。

●今治タオル同盟会の創設

今治地方でタオル製造が盛んになるのは大正初期からでした。麓常三郎(大三島出身)の改良織機に代表される、製織の改善が大きく影響したようです。今治織物同業組合の『組合沿革誌』には、大正2年以降のタオル生産量の統計データが見られ、同4(1915)年に初めて中国の満州・関東州へも輸出されたようです。大正4年の営業者数は25で、翌5年には47に増えています。

こうした中、今治地方最初のタオル同業者 組合「今治タオル同盟会」が大正4年に誕生



麓常三郎が考案した改良織機の広告 (海南新聞/明治40年5月7日付記事)

※「二挺筬バッタン」とも称され、同時に2列の製織を可能とし、今治でタオル生産が増える原動力ともなった。

します。発足時のメンバーは中村忠左衛門(現、中忠(株))・山本紋治・笠崎基・小澤峰一ら15人で、その中心人物が富本合名会社の麓常三郎でした。その後、しだいに白木綿や綿ネルからの転業者が相次ぎ、生産性を高めながら、高度な紋様を織り出す技術革新が進んでいきます。今治で初めてタオル製織の力織機が備わるのが大正7年で、ドビー織機は同8年、ジャカード織機は同15 (1926) 年のことでした。



藤高商店春季慰安会 (矢野七三郎像前で昭和10年3月撮影/(株)藤高所蔵)

※平成31年で創業100周年を迎える今治タオルメーカー老舗の藤高も、大正8年創業時は主に綿ネルを製造し、同10年頃から本格的にタオル製造を始める。